



# 漫録

## 火星への大道

長谷川久一



火星に人が住んでゐると言ふ説は、無線電信の發明者マルコニー氏が先づ之を信じた。氏は或る時この地球上に於いてあるべからざる、一種不可思議の無線電信を受取つた。如何に之を考へて見ても、嘗つて斯くの如き無線電信の記號は、地球上にはあり得べからざるものであるから、コハ必ず火星より發信したものなりと信じ、之を一般に

發表した。然るにこの發表以前既に米國に於いて、三人の人が同様の無線電信を受けたる事が分明し、合せて火星からは、四回までも同様の發信をなし居る事を確信するに至つたのである。之に對するマルコニー氏の意見によれば、火星は地球よりも幾萬年早く成立せる世界なるが故に、火星上に於ける無線電信の設備は、地球上のそれよりも幾百

千倍の強力なる機械を有して居るものなるを以て、火星から  
の無線電信は、地球に感應すれども、地球からの發信は  
頗る微弱なるが故に、聽覺の最も發達せる火星人と雖も、  
地球から來た無電を感受する事ができない。斯くの如きは、  
實に地球人の劣等性を明示せるものなるが故に、我が一代  
に於いて、現在の無線電信をして火星に感應せしむる迄、  
改良進歩せしむる爲に、奮闘努力をしたいものであると言  
つてゐるのである。要するに地球も亦、恒星より分裂した  
一遊星で、この一遊星に吾々人類が住んでゐるとすれば  
之よりも先に出來上つてゐる火星に更に高等なる火星人が  
居ると言ふ推論がどうしても出て來なければならないので  
ある。最近、外國から來た新聞の或るカリカチュアに地球  
人が驛辨の賣子の様に、肩から掛けた臺の上に食物を満載  
して、之を擔ひ切れぬ程の苦しみに喘へぎながら、兩手は  
全く塞がつてゐて、目の前にある其の食物を口に持つてゆ  
く事ができず、油汗をたらしながら頻りに苦しんでゐる側  
に、顏色の蒼白な少女。（月）がしょんぼりと立つてゐ

る。地球人の此の悲哀をマルスと書いた天體の上から智慧  
の有りそうなファウストに似た様な一哲人が呆氣にとられ  
て見てゐる圖がのつてゐる。世界で最も富んでゐると言は  
れてゐる米國に於いては去る三月に全般的の銀行取付が起  
り、又その失業群が食品供給所に長い縱列をなして（ブレ  
ッド・ライン）、毎日押しかけてゐると言ふ事等は、他國の  
金を吸收し盡して、之を自分の所にばかり集めてしまつた  
結果であつて、米國內の重要物産たる綿花、小麥、製造品  
等は貧乏な他國が買ひに來ないから、自然持ち腐れにな  
る。不景氣、失業者の大群、銀行取付等が即ちその結論であつて、火星人に對して我々の一大恥辱であると言ふ事之  
れ亦言ふを俟たないのである。

我等の見る所を以てすれば、この大宇宙には一定の秩序  
があり、天地に陰陽循環の理法がある。人生にはこの因果  
の法則があつて、互ひに縛となり經となり、以て悠久永遠  
の運行をなしつゝあるのが、萬世流轉の實相である。唯見  
れば如何にも雑然混然錯然たるその中に、自ら一つの大道

があると言はなければならぬ。若し兩星の間に信號が往來する事になれば地球人は、火星人の正しき示唆によつて常にその道を誤らない事ができるのではないか。而かも其の信號の時間は九分四一秒乃至十四分三十五秒と言ふ計算になつてゐるのである。唯ここに折角信號が交はされても更に大きな困難を思へば、どうしてそれを解くかと言ふ難關に逢着する、然し、此の關門を突破すると云ふ事が、文化の進歩の崇高なる目的に外ならないので、それについて思ひ起す事は、かのエヂプトの象形文字をロゼツタストーンで見て、同じ内容が三種の言語で書かれたものの中から、二種だけは既に知れてゐたが、之を頼りとして第三番目のエヂプトの文字を讀んだ時の苦心艱難はどれ程であつたかと言ふ事である。將來火星人の信號を解いてくれる契機が遂にどこかで發見されなければならない。マルコニー氏の意氣と同様に、地球上の文化人は皆この目的に向つて、力を合せて勇往邁進したならば、いつかは成功の彼岸に達する事であらう。天は自ら助くるものを助くと言はれ

てゐる。事の可能性を信する人のみ成功するのであつて、失望落膽の淵に沈む弱者の群からは成功者は決して出て來ないであらう。ギリシャの神話によると、昔デダルスは、その子イカルスを連れて、クレータ島のミノス王の國から逃れ出でようとした時、空中を通るより外には一つも道がないかつた。そこでデダルスは、自分と息子との爲に、翼を作つて逃れ出たが、イカルスは海の上を飛んでゐる時誤つて墮落し、デダルスのみ陸地に達したと言ふ事である。この神話に激勵されて、今や地球上における飛行界の備は全く出來上つた。茲に於いてか百尺竿頭一步を進めて、火星への大道をひらく者の出で來らん事を偏に待望して止まざる次第である。

たかと言ふ事である。將來火星人の信號を解いてくれる事が機が遂にどこかで發見されなければならない。マルコニー

氏の意氣と同様に、地球上の文化人は皆この目的に向つて、力を合せて勇往邁進したならば、いつかは成功の彼岸に達する事であらう。天は自ら助くるものを助くと言はれ